

認知症高齢者家族介護者の経験に関する質的研究

チョン チョンハ

チャーヘ ヨウン

★鄭 鍾和(三育大学校 社会福祉学部 教授) 趙 惠英(三育大学校大学院生)

1. 問題提起

認知症ケアに関する韓国における先行研究において明らかになっていることは、認知症高齢者介護は施設でケアを受けているのは全体認知症高齢者約55万人の内、約2万7千人であり、5%を占めているのが現状であり、殆どが家族介護に頼られている。特に、儒教文化に根をおき、キリスト人口40%を占める韓国社会においては認知症高齢者のケアは殆ど家族ケアに支えられているのが現実である。韓国においては、2008年から高齢者介護サービスが始まり、認知症高齢者のケアが重要な政策論点におかれており、2014年からは認知症の程度区分が拡大され経度認知症高齢者までサービス対象になってきたのである。1980～1990年半ばから家族の認知症ケアに関する研究が活発に行われおり、このような研究成果は認知症ケアに有効な情報を提供している。これまでの研究では危機介入モデル、ストレス介入モデル又は対処と評価の観点(coping and appraisal)から家族ケアを一方向的に理解しようとする研究(Kim MinJeong, 2010)が多く、直接的に問題解決型のケア方法についての研究は少ない(O JinJoo, 2003)。最近では包括的アプローチの必要性が求められ、家族ケア者の観点から介護の問題をみようとする視点(Kim TaeHyun・Jeon GilYang, 1995)で認知症ケアを他人のケア観点ではなく、内部介護者である、家族の視点で認知症ケアをしなければならないと問題提起(Kim YooJin, 2007)をしている。

2. 研究目的

本研究は認知症ケアをしている家族介護者(嫁)に数回にわたるヒアリング調査を行い、認知症ケア経験を現象学的アプローチによって把握しようとする質的研究である。ここで認知症ケアとは他人を介護する介護や見守りの次元を乗り越え、認知症高齢者が亡くなった後に認知症高齢者をケアしていた家族介護者とそのケア経験を語り、そこから掘り出す内面的葛藤構造に着目し、経験におけるナラティブ(Narrative)を現象学的に解釈しようとする試みである。このような現象学的解釈により、これまでの認知症ケアにおける他者の視点である客観的スキルから内部ケア者である家族介護者の視点の主観的側面を明らかにし、認知症ケアの難しさを現象学的アプローチによって再解釈したい。

3. 研究方法と資料収集

本研究はアメデオ ジオルジ(Amedeo Giorgi, 2004)の現象学的アプローチを通して、認知症高齢者ケア経験のナラティブを本質的に把握しようとした。そのため、本論文では内部ケア者である家族ケアの経験に着目し、そのケア経験の本質を明らかにしようとする現象学的アプローチで研究が進められた。研究対象であるケア経験者の語りは、研究者の聞き手としての心構えと開放的態度を持ち、ケア経験者の語りの中から事実と現象を見分け、学問的観点から意味を持つ内容を明らかにし、その意味を統合するプロセスを踏んでいる。

研究プロセスは、具体的に説明されている四つの段階において概念化される。構造を扱うプロセスは段階又時間毎の文脈によって体系的に組織していくのである。即ち、①全体的な認識、②意味段位の区分、③意味段位の学問的用語への変容、④構造統合の四つの段階(Amedeo Giorgi, 2004)を踏んで研究が進められた。

資料収集の段階においては、ケア経験を十分に味わっている認知症ケア経験が一年以上ある嫁をヒアリング対象に選定した。その理由は、韓国の家父長的な家族構造から多くのケアは長男の嫁が介護に携わっているからである。また、ヒアリング対象者の選びは、高齢者在宅ケアセンターから紹介してもらい、6カ月間に渡って、数回ヒアリング調査を行った。

4. 倫理的配慮

研究に参加する人へのプライバシー保護のため、参加者に本研究の目的、内容、研究方法などについて十分説明し、研究同意書を書いてもらいヒアリングと録音の許可を得ている。また、参加同意をした参加者にヒアリング内容に関して秘密保護を約束しており、研究を進めていく過程においても本人の語りが気に食わない場合には途中で辞めることが可能であることを告知した。ヒアリング後には本人の語りをフィードバックして自発的研究参加を原則に研究が進められた。さらに、本研究の手続きにおいては日本社会福祉学会の研究倫理方針を守って研究を行っている。

5. 考察

本研究は認知症高齢者家族ケアの経験を質的研究方法である現象学的アプローチにしたものでその意義があると思う。これまでの研究では他者の観点からケア経験に焦点を当ててアプローチしたのに対して内部者である家族ケア経験を現象学的にとらえようとした試みと家族ケアの主介護者である嫁の経験現象学的アプローチしたのは大変意義深いものである。

第一、介護者の集中ヒアリングの内容からケアの深い意味を再確認することができた。特に、家族ケアの経験に着目してみるとケアする期間が長く、認知症の程度が重いほど夫婦間の葛藤や介護者の健康衰弱、家族間の葛藤深化、介護者こどもの犠牲、高齢者介護疲れによるストレスからくる家族関係の義烈、認知症高齢者が亡くなるまでの医療費負担などの情緒的、経済的負担を抱えることを現象学的に把握することができた。

第二、認知症高齢者の介護保険制度においては、十分な介護サービスを受けることができない仕組みになっており、家族介護者は補い手としてケアに携わっている現象が把握できる。しかし、認知症高齢者は家族にケアを受けようとする心理的頼りが強いと分析できる。これは、経度の認知症高齢者ケア経験から強く表れる現象である。即ち、介護者である嫁の介護経験語りでは、不十分である介護制度の現実とは裏腹に、嫁に介護してもらおうのが当然のように考えら認知症高齢者の生活習慣の思い違いが見られる。これは、伝統的儒教社会の中で高齢化を迎え、認知症になって来た被介護者と介護者の隔たりを物語っている現象の一つである。特に、テレビや新聞で報じられる施設における高齢者虐待や孤独死等の情報は社会的制度の良さよりも家族介護の心理的プレッシャーとなり認知症高齢者の家族は大変さを覚悟の上、施設に預けることよりも家族の負担で介護を行いたいと考えているのである。従って、このような現象を無くすためには、施設ケアの環境整備や各種メディアでの広報活動を広げる必要性が求められている。

第三、結論的に言えば、韓国社会における認知症高齢者ケアの最も大きい負担を抱えている介護者は嫁であり、嫁の介護経験から家族ケアの内的側面をのぞくことができたのである。認知症高齢者ケアは様々な家族環境や多様な制度に関連して理解するの必要があり、認知症の程度や傾向に即した合わせケアが必要(Kim ChunMi, 2005)であると言える。従って、研究で明らかになったように高齢者認知症ケアは、単に介護する技術や介護制度、マンパワー確保の問題よりも認知症ケアスキルの発掘と合わせケアの普及、家族が安らかに認知症高齢者ケアができる環境整備、介護負担を軽減できる相談支援体制整備が今後の課題である。

[参考文献]

- Kim YooJin: 認知症高齢者家族介護の経験に関する先験的現象学研究, 韓国老年学 Vol. 27, No. 4, 963-986, 2007.
- Kim MinJeong: 療養保護士の老人ケア経験, 韓西大学情報通信大学院修士論文, 2010.
- Kim TaeHyun・Jeon GilYang: 認知症老人の扶養経験に関する研究, 韓国老年学会, Vol. 15, No. 1, 15-27, 1995.
- Kim ChunMi: 認知症老人を介護する家族の対処過程, 地域社会看護学会誌, Vol. 16, No. 3, 2005.
- O JinJoo: 認知症入所施設職員のケア経験, 韓国老年学会誌, Vol. 23, No. 1, 75-92, 2003.
- Amedeo Giorgi: The early history of phenomenological psychological research in America, *Journal of Qualitative Research*, Vol. 5, No.2, 2004.